

話し言葉と書き言葉

——初年次教育の基礎資料として——

石 黒 圭

〈要旨〉

本研究は、日本人学部学生 341 名を対象に、話し言葉と書き言葉の入り混じった説明文のなかから、話し言葉的な表現を抜きだして修正するという作業をしてもらった。その結果、日本人学部学生が書き言葉への修正をおこなうさい、以下のような三つの問題を抱えていることが明らかになった。

- ①話し言葉でのみ使われる表現は抜きだせるが、修正が、話し言葉・書き言葉いずれでも使えそうなレベルに留まり、硬い、書き言葉特有の表現にまで至らないケースが多い。
- ②修正する表現の候補が複数ある場合、当該の文脈に合う表現をうまく選択できず、ぎこちない表現になることが多い。
- ③動詞を名詞化するなど、統語的なレベルでの話し言葉性が看過されやすい。

〈キーワード〉話し言葉、書き言葉、ジャンル、文体、表現選択

1. はじめに

初年次教育の一つの柱は、学術的な内容の論文・レポートが、内容にふさわしい文体で書けるようになることである。文体を考える場合、まず重要になるのが、話し言葉と書き言葉の区別であろう。学部学生の書く論文・レポートのなかにしばしば話し言葉が混入する現象は多くの教師が日々目にしており、携帯メールやブログ、Twitter をはじめとして、話すように書くメディアの普及にともない、そうした現象は加速しているように思われる。

だとすれば、話し言葉と書き言葉を区別して書け、と指導すればよいはずである

すごい早い—すごく早い—とても早い—非常に早い—きわめて早い



そこで、本稿では、話し言葉専用、書き言葉専用、話し言葉・書き言葉兼用という三つに区分することを提案したい。その3区分法にしたがって上の例の程度副詞を区別すると、「すごい」「すごく」は話し言葉専用、「非常に」「きわめて」は書き言葉専用、「とても」は話し言葉・書き言葉兼用となる。

森山（2003）が指摘しているように、話し言葉と書き言葉の区別は程度問題であり、正確には話し言葉性（らしさ）、書き言葉性（らしさ）として相対的に考えるべきものである。さいわい、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）をはじめ、大規模な日本語コーパスが整いつつある状況であるので、そのような話し言葉性（らしさ）、書き言葉性（らしさ）の客観的な線引きは今後の研究の進展のなか

で解明されることが期待される（その先駆的な研究としては、丸山（2009）、井上（2009）を参照）。

話し言葉と書き言葉の区別の難しさの第二は、話し言葉的、書き言葉的という軸で考えるだけでなく、それ以外の軸も考える必要があるという点である。

職能給の体系のもとでは、勤続年数や年齢、性別に関係なく、個々人の能力に応じた {給料／給与／収入／所得／賃金／報酬} を受け取ることになる。

上の例において、サラリーに相当する漢語「給料」「給与」「収入」「所得」「賃金」「報酬」のいずれも入りうる。しかし、そのニュアンスは微妙に異なっている。

文体でいえば、「給料」は漢語ではあるものの、「お給料」と「お」をつけられることから、話し言葉・書き言葉兼用であり、残りはいずれも書き言葉専用と見なせそうである。

「給与」は「給料」の書き言葉と見ることができ、文体的にやや硬い点をのぞけば、「給料」とほぼ同等の意味だろう。

「収入」は支給されるという面よりも、入ってくるという面が強く、入ってくるお金をトータルでとらえ、総額を表している。「支出」と対になる点でもそのことがわかる。「所得」も「支出」と対になることがあり、「収入」に近い意味だが、税法上の概念ということもあり、より硬い言葉であるという印象を受ける。

「賃金」は働いたことにたいする対価であるが、労働者が自らの地道な労働をとおして稼いだというイメージがある。労働基準法に使われるやはり硬い印象を与える概念である。「報酬」も働いたことにたいする対価だが、労働というよりむしろ仕事、それも成果に比例する対価であり、一時的なもので高額なイメージがある。

この六つの漢語の違いからわかるのは、同じ意味を表していても、使われる文脈やジャンルによりふさわしい語があり、文体的に硬いか軟らかいかという単純な一つの軸では測りきれない部分があるということである。

話し言葉と書き言葉の区別の難しさの第三は、同じ語でも使われる品詞によって硬さが異なる点である。

たとえば、「消費税率引き上げの是非を問う選挙」の「是非」と「是非我が家においでください」の「是非」は異なるだろうし、「絶対音感」「絶対主義」の「絶対」と「絶対行きたくない」の「絶対」は異なるだろう。このように、漢語名詞が副詞として使われると、文体的に軟らかくなる傾向が見られる（石黒 2004）。

また、「輸出が増加する傾向」よりも「輸出の増加傾向」が好まれ、「消費が拡大する局面」よりも「消費拡大局面」が好まれるのも専門的な文章の特徴である。つまり、漢語のスル動詞を名詞化することで語の文体を硬くできるのである（Chafe 1985, 今村 2004）。

以上、話し言葉と書き言葉の区別の難しさについて述べてきたことをまとめておく。

- ①話し言葉と書き言葉は「らしさ」という程度の問題で、段階性がある。
- ②話し言葉と書き言葉には、当該の文脈やジャンルへの適切性など、硬さ一軟らかさという 1 本の軸だけでは測りきれない面がある。
- ③話し言葉と書き言葉は同じ語でも統語的な働き（品詞）によって文体が異なる。

2. 調査の方法と目的

話し言葉と書き言葉の区別の難しさを踏まえ、以降で、今回おこなった調査とその結果について述べたい。調査は、341 名の学部学生の文体意識を調査したもので、2011 年 4 月に都内の大学でおこなった。課題は次のとおりで、15～30 分程度で作業してもらった。

問 以下の文章で、書きことばとしてふさわしくない表現を探し、それを書きことばらしい表現に直しなさい。修正は / / の単位でおこない、修正したい原文の表現は二重線 で消し、そのすぐ下に、修正後の表現を書きなさい。

(1) JT（日本たばこ産業）は、/ (2) 1965 年から/ (3) 「全国たばこ喫煙者率調査」を/ (4) やっていて、/ (5) その結果を/ (6) 毎年/ (7) 披露している。/ (8) 2009 年 5 月の/ (9) その調査によると、/ (10) タバコを吸う/ (11) 率は、/ (12) 1 年前よりも/ (13) 0.8% 少ない/ (14) 24.9% であり、/ (15) タバコを吸う/ (16) 癖のある/ (17) 大人は/ (18) だいたい/ (19) 4 人に 1 人である/ (20) ことがわかった。/ (21) 男と女を別にすると、/ (22) 男子では/ (23) 0.6% 少ない/ (24) 38.9%, / (25) 女子では/ (26) 1.0% 少ない/ (27) 11.9% だった。/ (28) それから、/ (29) タバコを

吸う／(30) 率から／(31) 全国の／(32) タバコを吸う／(33) 人数を／
 (34) 見積もると、／(35) 全体では／(36) 1年前よりも／(37) 79万人少ない／
 (38) 2601万人、／(39) 男子は／(40) 27万人少ない／(41) 1957万人、
 ／(42) 女子は／(43) 52万人少ない／(44) 644万人になる。／

(45) この調査によれば、／(46) タバコを吸う／(47) 率は／(48) 14年間
 続けて／(49) だんだんと／(50) 少なくなっている／(51) そうだ。／
 (52) その背景には、／(53) お年寄りが／(54) 増えたこと、／(55) タバコ
 と健康に／(56) 関心を持つ人が／(57) 増えたこと、／(58) タバコを吸うこ
 とへの／(59) 規制が／(60) 強くなったこと、／(61) 大人と子どもを／
 (62) 識別する／(63) 自販機が／(64) 取りいれられたこと／(65) などがある
 ／(66) と考えている／(67) みたいだ。／(68) なお、／(69) 男で／
 (70) タバコを吸う人は、／(71) 歳に／(72) 関係なく／(73) ずっと／(74)
 減ってきているが、／(75) 女で／(76) タバコを吸う人は、／(77) とくに／
 (78) 若い子たちを／(79) 中心に／(80) かえて／(81) ちょっとずつ／
 (82) 増える／(83) 傾向にある。

実際に配布したシートは、本文のあいだに行間があり、容易に書きこめるようになっただけである。また、番号は、説明の便宜上つけたもので、もともとの課題にはない。

なお、この課題は、石黒（2009: 122-123）によるもので、このタバコの文章（以下「問題文」と呼ぶ）は、もともと硬い文章だったものに、ところどころ話し言葉的な表現を混入させて作ったものである。その硬い文章（以下、「原文」と呼ぶ）は次のとおりである。

（原文）JT（日本たばこ産業）は、1965年以降「全国たばこ喫煙者率調査」を実施しており、調査結果を毎年公表している。2009年5月の同調査によると、喫煙率は前年比0.8%減の24.9%であり、喫煙習慣のある成人はほぼ4人に1人であることが判明した。男女別にすると、男性では0.6%減の38.90%、女性では1.0%減の11.9%であった。また、喫煙率から日本全国の喫煙者数を推計すると、全体では前年比79万人減の2601万人、男性は27万人減の1957万人、女性は52万人減の644万人となる。

同調査によれば、喫煙率は14年連続して徐々に減少傾向にあるという。そ

の背景には、高齢者の増加、喫煙と健康への関心の増大、喫煙への規制の強化、成人と未成年者を識別する自動販売機の導入などがあると考えられている。ちなみに、男性の喫煙者は年齢にかかわらず一貫して減少しているが、女性の喫煙者は、とりわけ若い世代を中心にむしろ微増傾向にある。

問題文を学生が直した結果と、この原文とを比較することで、現在の学部学生が持っている書き言葉意識の傾向が見えてくるはずである。そして、そこにある種の問題が発見できれば、その改善を、初年次教育の文章表現教育の一つの柱に据えることが可能となろう。

3. 調査の結果

まず、どのような箇所が多く修正されているかを概観しておきたい。

表 1 課題文修正頻度一覧

番号	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
人数	5	46	11	338	7	6	283	27	126	269	78	146	41
(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)
8	217	185	137	305	19	83	312	262	46	7	259	39	91
(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)	(34)	(35)	(36)	(37)	(38)	(39)	(40)	(41)
296	270	80	4	264	149	70	9	144	28	11	255	30	3
(42)	(43)	(44)	(45)	(46)	(47)	(48)	(49)	(50)	(51)	(52)	(53)	(54)	(55)
255	29	77	70	270	68	121	295	235	176	7	235	176	56
(56)	(57)	(58)	(59)	(60)	(61)	(62)	(63)	(64)	(65)	(66)	(67)	(68)	(69)
64	162	222	11	195	157	6	177	162	55	222	329	23	312
(70)	(71)	(72)	(73)	(74)	(75)	(76)	(77)	(78)	(79)	(80)	(81)	(82)	(83)
217	294	50	285	280	312	222	27	311	8	149	339	228	8

全数が 341 名であることを考慮すると、(4) の 338 名、(81) の 339 名のようになほとんどの学生が直しているところがある一方、(31) の 4 名、(41) の 3 名など、ほとんどの学生が直していないところもある。

以下、冒頭から順に一つひとつ見ていくことにするが、ほとんどの人が直してお

らず、かつ、課題文と原文の表現が一致する箇所、および、似たような表現が2度以上出てくる箇所については原則として説明を省くことにする。

なお、例文のあとのパーレンのなかは、学生が実際に答えた表現を示してある。ただし、紙幅の関係で、3名以上が挙げた表現だけを示すことにする。なお、漢字や仮名、読点といった表記の変更についても、言葉の選択とは直接関わらないものと考え、今回の調査では取りあげなかった。

(1) JT (日本たばこ産業) は (合計: 5, 日本たばこ産業 (JT) は: 3)

(1) は、ほとんどの学生が修正しておらず、かつ、課題文と原文の表現が一致している。それでも、あえて取りあげたのは、「日本たばこ産業 (JT)」という修正が秀逸だったからである。たしかに、正式名称を先に出し、略称をパーレンに入れ、そのうえで略称を以降で繰り返すのが、書き言葉では一般的である。その点に気づいた学生が3名存在した。

(2) 1965 年から (合計: 46, 1965 年より: 26, 1965 年以来: 10, 1965 年以降: 9)

「から」は話し言葉・書き言葉兼用なので、修正しなくても問題がないが、修正するとすれば、和語の「より」、漢語の「以来」「以降」である。原文は「1965 年以降」であった。

(3) 「全国たばこ喫煙者率調査」を (合計: 11, 「全国喫煙者率調査」を: 6)
(説明略)

(4) やっていて (合計: 338, 行なっており: 132, 行なっていて: 78, 実施しており: 67, 実施して: 26, 実施し: 13, 行ない: 10, やっており: 6, しており: 3, 行なって: 3)

「やっていて」は明らかに話し言葉専用の表現である。「やる」にせよ、「する」にせよ、行為に関わる概念を広く表せる。しかし、厳密さを重視する書き言葉では、意味が漠然としているこのような表現は避けられる傾向にある。似た意味の、より硬い表現を探すと「行なう」となり、全体のおよそ3分の2の学生が選択していた。一方、意味が限定される表現としては「実施する」であり、全体の3分の1弱の学生が選択していた。後者のほうが、意味の限定性が強いという意味でこの文脈にふさわしい表現だろうが、多くの学生は「行なう」が発見できた時点で満足してしま

い、それを上回る表現を探すという意識が希薄だったように思われる。

(5) その結果を（合計：7，調査結果を：3）（説明略）

(6) 毎年（合計：6，例年：5）（説明略）

(7) 披露している（合計：283，公表している：102，公開している：89，発表している：80，報告している：5）

「披露する」は書き言葉に使えないわけではないが、個人的な内容を披露することを表す動詞であり、この文脈にふさわしくない。「1. はじめに」で②「話し言葉と書き言葉には、当該の文脈やジャンルへの適切性など、硬さ一軟らかさという1本の軸だけでは測りきれない面がある」としたものと重なる。

ここでは、もっとも多くの学生が選択している「公表している」が、原文の表現とも一致し、もっともふさわしいだろう。ただし、「公開している」「発表している」がかならずしも悪いわけではない。「ウェブサイト上に」と考えれば「公開している」が、「記者会見を開いて」と考えれば「発表している」がふさわしくなるからである。

(8) 2009年5月の（合計：27，2009年5月に行われた：8，2009年5月における：7，2009年5月に実施された：6）（説明略）

(9) その調査によると（合計：126，調査によると：64，同調査によると：11，調査結果によると：9，その調査によれば：6，当調査によると：6，調査によれば：5，当該調査によると：5，本調査によると：5，この調査によると：3）

(9) で一部の学生に指摘されているのは、「その調査」の「その」である。触れなかったが、(5) でも若干「その」が話し言葉的に響くという指摘もあった。しかし、(5) と (9) の大きな違いは、(5) はまさに直前のものを指しているのにたいして、(9) は仕切りなおして新たに述べはじめているという点だろう。原文では「同調査」であるが、ここでもっとも多く選ばれていた「調査」も有力であろう。一方、「当調査」「当該調査」「本調査」はここでは落ち着きが悪い。おそらく「同調査」が出てこなかったための次善の策であろうが、こうした硬い表現に不慣れな様子が垣間見られる。

留学生であれば、指示表現の「この」「あの」「その」の区別を教えることが重要であるが、日本人学生の場合、「同～」「当～」「本～」の区別を教えることの必要

性が示唆される。

(10) タバコを吸う (合計：269, 喫煙：161, 喫煙者：45, 喫煙者の：39, タバコを吸う人の：10)

(11) 率は (合計：78, 割合は：58, 人の割合は：14, 人の比率は：3)

(10) と (11) はセットになっており、基本的に、(10) を修正するか (11) を修正するかは二者択一である。(10) を修正する場合は「喫煙率」とし、(11) は直さず、(11) を修正する場合は「タバコを吸う割合は」とし、(10) は修正しないことになる。数字に表れているとおり、(10) を修正するほうが一般的であろうが、(11) の「率」を修正する発想が出てくるのは、「率」は漢語の接尾辞として使えば硬い表現になりうるが、名詞の単独使用ではかならずしも硬い表現とはいいきれないからであろう。たとえば、「超楽しい」や「激まずい」を「超大作」や「激辛」とすると接辞化すると話し言葉らしさが減ずると同様、「1. はじめに」で挙げた③「話し言葉と書き言葉は同じ語でも統語的な働き (品詞) によって文体が異なる」一つの例であると考えられる。

(12) 1年前よりも (合計：146, 前年よりも：31, 昨年よりも：31, 1年前に比べ：11, 昨年より：8, 前年より：8, 前年比：5, 前年に比べ：5, 1年前と比べ：4, 1年前に比べて：3, 1年前と比較して：3, 1年前と比べて：3, 前年度よりも：3, 昨年度よりも：3)

(12) は「1年前」「よりも」いずれも修正することができる。「1年前」を「去年」に修正しても日常語的なニュアンスは消えないので、「去年」の硬い表現である「昨年」を使うことがまず考えられる。しかし、「去年」にしろ「昨年」にしろ、今という時点を中心にした直示的な表現である。直示的な表現は話し言葉的になりやすい。そこで、「1年前」の硬い表現である「前年」の選択が有力になる。また、「前年」ならば「前年比」という語構成が可能である点も、「前年」がこうした文体にふさわしい理由であろう。

(13) 0.8% 少ない (合計：41, 0.8% 減の：13, 0.8% 減少した：7, 0.8% 低い：6, 0.8% 減少して：4, 0.8% 減少の：3, 0.8% 減少し：3)

「0.8% 少ない」はやや話し言葉的であるが、どのように修正するか迷うところである。「0.8% 低い」としても印象は大きくは変わらない。漢語を使い、「0.8% 減少

した」としても硬い感じに乏しい。「減少した」が動詞であるからである。「1. はじめに」で触れたように、名詞にしたほうが書き言葉的になることを考え、「0.8% 減の」として初めてしっくりいく表現になる。

「0.8% 少ない」を直した人が意外に少なかったのは、おそらく、話し言葉的であると考えた人が少なかったからではなく、今回の調査の性格上、どう直してよいかわからない場合は指摘できないというところに原因があったためと思われる。その意味で、この部分を修正することはかなり高度な技術が必要であるといえそうである。

(14) 24.9% であり (合計: 8, 24.9% となり: 3, 24.9% で: 3) (説明略)

(15) タバコを吸う (合計: 217, 喫煙: 133, 喫煙の: 40, 喫煙する: 28, 喫煙者は: 3, 喫煙をする: 3) (説明略)

(16) 癖のある (合計: 185, 習慣のある: 127, 習慣がある: 15, ϕ : 10, 習慣を持つ: 7, 傾向のある: 5, する: 3, 癖がある: 3) (説明略)

「癖」は日常語であり、修正するとすればまず「習慣」であろう。もちろん、(15) を「喫煙」とし、訓読みの「くせ」ではなく音読みの「へき」と読ませることとで硬い文体にすることも可能である。

(17) 大人は (合計: 137, 成人は: 115, ϕ : 5, 成年は: 5, 成人の割合は: 5, 成年者は: 4)

「大人」は話し言葉・書き言葉兼用であり、あえて直さなかった学生も多かったが、直した学生は「成人」とするケースが多かった。たしかに「大人」はいつから大人になるのかやや曖昧であるが、「成人」であれば法律上 20 歳になってからという定義が明確であり、そうした発想が書き言葉的であるとはいえるだろう。

(18) だいたい (合計: 305, およそ: 160, 約: 78, おおよそ: 57, おおむね: 4)

課題文の「だいたい」は、原文では「ほぼ」であった。しかし、「ほぼ」は指す数値の幅が狭いのになんか、「だいたい」は緩やかである。そのため、「ほぼ」ではなく、「だいたい」と同様に緩やかな「およそ」や「おおよそ」が選ばれたのは首肯できる。

一方、「約」は、後続の (19) 「4 人に 1 人」とは共起しにくい印象がある。(19) を「4 分の 1」と変えればよいが、多くの学生は「約 4 人に 1 人」という組み合わせ

せを許容していた。こうしたあいまいな表現に敏感になることも、大学での学びのなかで今後みがくべきスキルの一つである。

(19) 4人に1人である（合計：19, 4分の1である：4, 4人に1人の割合である：4）（説明略）

(20) ことがわかった（合計：83, ことが判明した：59, ことが明らかになった：11, と判明した：3, ことがわかる：3）

「わかった」は話し言葉的な表現ではあるが、どう修正するかは悩ましい。「理解した」と直せるのなら易しいが、ここではそうは直せない。原文は「判明した」であり、そう直した学生が多かった。「明らかになった」とした学生もあり、それも一法だろう。

(21) 男と女を別にすると（合計：312, 男女別にすると：83, 男女別に見ると：53, 男女別では：35, 男性と女性を別にすると：29, 男女を別にすると：25, 男女別で見ると：11, 男女別に見てみると：6, 男性と女性を区別すると：6, 男女を区別すると：3, 男女別に分けると：3）

書き言葉では、漢語をベースにした簡潔な表現にすると収まりがよい場合が多い。ここでは「男女別にすると」「男女別に見ると」「男女別では」が上位3位を占め、いずれも適切な修正である。

(22) 男子では（合計：262, 男性では：188, 男性は：58, 男子は：4, 男性が：3）
「男子」は4分の3強の学生が直しており、かなり高い確率で手が増えられていると見るべきなのかもしれないが、筆者自身はほとんどすべての学生が直してくると予想していただけに意外であった。

筆者にとって「男子」「女子」は生徒のイメージであり、典型的には小学生、広げてもせいぜい中学生・高校生どまりであるが、「男子」の場合は「草食系男子」、
「女子」の場合は「女子会」という表現が流行語として普及し、年齢の幅がかなり広がったと学生のなかでは認識されているのかもしれない。

しかし、書き言葉は、話し言葉にくらべて変化の速度が遅く、保守的な媒体であることを考えると、こうした意味の変化を積極的に取りこむことは避けたほうが無難だろう。

(23) 0.6% 少ない（合計：46, 0.6% 減の：12, 0.6% 低い：7, 0.6% 減少し：6, 0.6% 減少した：5, 0.6% 減少して：3, 0.6% 減少の：3）（説明略）

(24) 38.9%（合計：7, 38.9% であり：4）（説明略）

(25) 女子では（合計：259, 女性では：189, 女性は：55, 女子は：4）（説明略）

(26) 1.0% 少ない（合計：39, 1.0% 減の：12, 1.0% 減少した：6, 1.0% 低い：6, 1.0% 減少の：4, 1.0% 減少し：4, 1.0% 減少して：4）（説明略）

(27) 11.9% だった（合計：91, 11.9% であった。：82, 11.9% となった。：4, 11.9% である。：3）（説明略）

「だった」と「であった」の差は微妙である。双方とも普通体であるが、「だ」のほうは書き手の主観的な判断が加わる印象があるのにたいし、「である」のほうはそうした価値判断の混入を避けて客観的に述べている印象がある。ここでは過去形であり、「だ」「である」よりもそうした文体差は小さいが、約4分の1の学生は、論文などに見られる「であった」の、事実をもっともらしく描く客観的な語感を優先したものと思われる。

(28) それから（合計：296, また：158, さらに：60, そして：45, 加えて：7, 次に：6）

接続詞は文体的な特徴が出やすい品詞である。ここでは、「それから」が問題になっており、87%近い人が修正を施している。そして、その過半数が「また」としている。石黒ほか（2009）によれば、論文のなかで使われる接続詞の1位が「しかし」、2位が「また」であり、ここでの結果もそれと合致するものである。

(29) タバコを吸う（合計：270, 喫煙：172, 喫煙者：44, 喫煙者の：35, タバコを吸う人の：7, 喫煙する：3）（説明略）

(30) 率から（合計：80, 割合から：55, 人の割合から：11）（説明略）

(31) 全国の（合計：4, 全国における：4）（説明略）

(32) タバコを吸う（合計：264, 喫煙：152, 喫煙者の：62, 喫煙者：36, 喫煙する：8）

(33) 人数を（合計：149, 者数を：90, 数を：28, 人口を：15, 人の数を：6, 者を：3）

「人数」というのは話し言葉・書き言葉兼用の表現であるが、より硬い文体にするには、「喫煙（者の）人数」ではなく、「喫煙者数」とするのがよい。「喫煙」と

「者数」を組み合わせた学生と、「喫煙者」と「数」を組み合わせた学生を合わせ、全体の3分の1がその点に気づいていた。

- (34) 見積もると（合計：70，概算すると：17，算出すると：10，計算すると：9，推測すると：6，推定すると：5，予測すると：5，推計すると：3，割り出すと：3，見積もったところ：3）

「見積もる」の原文は「推計する」であったが、見慣れない語であるせいか、選択者は少なく、「概算する」「算出する」「計算する」「推測する」「推定する」「予測する」など多様な語がまんべんなく選ばれていた。「計算する」をのぞき、硬いという意味ではどれも硬い語ではあるが、そのなかから適切な語を選ぶとなると、「1.はじめに」の②で述べたように、当該の文脈やジャンルへの適切性の考慮という、一段高い能力が必要になる。

- (35) 全体では（合計：9，全体は：4）（説明略）

- (36) 1年前よりも（合計：144，昨年よりも：36，前年よりも：32，1年前に比べ：9，前年より：9，昨年より：8，1年前より：5，前年比：4，前年度よりも：4，1年前と比べ：4，1年前に比べて：3，前年に比べ：3，1年前と比較して：3，1年前と比べて：3）（説明略）

- (37) 79万人少ない（合計：28，79万人減の：10，79万人減少し：7，79万人減少した：6）（説明略）

- (38) 2601万人（合計：11，2601万人となり：6）（説明略）

- (39) 男子は（合計：255，男性は：219，男性では：23，男子では：4）（説明略）

- (40) 27万人少ない（合計：30，27万人減の：11，27万人減少し：7，27万人減少した：5）（説明略）

- (41) 1957万人（合計：3）（説明略）

- (42) 女子は（合計：255，女性は：225，女性では：2，女子では：4）（説明略）

- (43) 52万人少ない（合計：29，52万人減の：10，52万人減少し：7，52万人減少した：6）（説明略）

- (44) 644万人になる（合計：77，644万人となる：22，644万人となった：17，644万人であった：13，644万人になった：12，644万人である：8）

微差ではあるが、「になる」を「となる」とすると硬い印象を与えることができる。一方、「なる」を「なった」と過去形にする例も見られたが、過去形にするこ

とで具体性を帯びるので、そうした操作はむしろ逆効果のように思われる。

- (45) この調査によれば（合計：70，この調査によると：45，本調査によれば：4，同調査によれば：3）

筆者自身は気づかなかったが、「よれば」を「よると」にすると書き言葉らしくなるという指摘がここでは見られた。「よれば」のほうが、当該の調査をわざわざ取りあげてきた感じがするため、やや主観性が強い印象を与えるのだろう。その意味で、中立的な「よると」のほうがよいとする指摘は一理ある。

- (46) タバコを吸う（合計：270，喫煙：174，喫煙者：47，喫煙者の：32，タバコを吸う人の：8）（説明略）

- (47) 率は（合計：68，割合は：51，人の割合は：11）（説明略）

- (48) 14年間続けて（合計：121，14年間連続で：50，14年連続で：32，14年間連続して：22，14年間継続して：3）

「続けて」を「連続で」あるいは「連続して」とするのは、語種による文体差を生かした修正で、妥当なものである。直さなかった学生が3分の2近くに上るのがむしろ不思議に思えるが、「連続で」を選択するとこの部分の意味が強調され、たとえば「14年間連続で徐々に」という組み合わせになってしまうと、くどい印象を与えるため、あえて直さなかったのかもしれない。

また、細かな点であるが、「14年間」より「14年」のほうがシンプルで、硬い文体になる。しかし、その点に気づけた学生は全体の1割に留まった。

- (49) だんだんと（合計：295，徐々に：222，次第に：43，少しずつ：15，年々：5， ϕ ：3）

擬音語・擬態語、いわゆるオノマトペは、そのほとんどが話し言葉専用である。「だんだん」は「段」という漢語から派生したオノマトペではあるが、それでも話し言葉的である。多くの学生が「徐々に」、あるいは「次第に」と直したのは首肯できる。一方、「少しずつ」と直した学生もいたが、この修正は効果が薄いように思われる。「年々」という表現はこなれてはいるが、この文脈では「14年続けて年々」となってしまう、やや冗長であろう。

- (50) 少なくなっている（合計：235，減少している：89，減少してきてい

る：84，減少傾向にある：24，低下している：5，低下してきている：4，
少なくなっている：4，減ってきている：4，減少し続けている：3)

和語から漢語に語種を変更することを意図した、「少なくなる」から「減少する」への置き換えは、3分の2の学生が気づいていた。ただ、「14年連続で徐々に減少してきている」とすると、継続的な変化を表す表現が「連続で」「徐々に」「～してきている」と三つ続き、重複感がある。そこで、「減少してきている」ではなく「減少している」と文末を単純化したものをもっとも多くなっている。そうした修正に、学生の細やかな心遣いを感じられる。また、「～してきている」を省く別法として、原文のように「減少傾向にある」とすることも可能であろう。

- (51) そうだ（合計：176，ようだ：53， ϕ ：36，ようである：19，ことがわかる：16，という：15，そうである：7，らしい：4，とのことだ：4，といえる：3)

「そうだ」は伝聞ではあるが、他者から聞いたことで自分には責任がないというニュアンスが生じることがある。そこで、新聞では「そうだ」のかわりに「という」が頻用され、原文でもそのようになっている。ところが、全体としてもっとも多かったのは、「ようだ」であった。たしかに「ようだ」は「みたいだ」にくらべて硬い文体を表せるが、単純な伝聞ではなく、書き手自身の推量も含む伝聞になる。その意味で、置き換えるものとしてはふさわしくない。むしろ、36名の学生がしたように、こうした伝聞・推量に関わる文末表現を省き、事実として述べるほうが、書き言葉らしいように思われる。

- (52) その背景には（合計：7）（説明略）

- (53) お年寄りが（合計：235，高齢者が：147，高齢者の：41，年配者が：12，お年寄りの：7，老人が：6）

「お年寄り」を直したのは全体の3分の2である。「お～」がつくものは話し言葉らしく感じられ、このような待遇性は硬い書き言葉では避けるのが原則である。だが、丁寧に表現されていることで違和感を抱かなかった学生が3分の1ほどいたものと思われる。

- (54) 増えたこと（合計：176，増加したこと：105，増加：57，増えたことや：5， ϕ ：3，増加したことや：3）

「増える」を「増加する」にすることは当然考えられるが、ここではもう一步踏みこんで、動詞を名詞化することで硬い文体にすることを考えたい。(53)とあわせて「高齢者の増加」と修正でき、57名がそのように修正している。

(55) タバコと健康に(合計:56, 喫煙と健康に:12, タバコと健康の関係に:6, タバコと健康への:6, 健康に:4, 喫煙と健康の関係に:3, タバコと健康との関係に:3)

(56) 関心を持つ人が(合計:64, 関心を持つ人の:36, 関心の:13)

(57) 増えたこと(合計:162, 増加したこと:103, 増加:46, 高まり:9)

ここも、動詞を名詞化することで硬い文体にすることを考えると、「喫煙と健康に関心を持つ人の増加」となるが、さらに動詞を一つ減らして「喫煙と健康への関心の増加」とすると、すっきりする。ここで「増加」でなく「高まり」を使った9名はセンスが光る。「関心」という語との相性は「高まり」のほうがよい。『喫煙と健康への関心の高まり』とすることで締まった表現になる。

(58) タバコを吸うことへの(合計:222, 喫煙への:130, 喫煙に対する:45, 喫煙することへの:9, 喫煙:5, タバコを吸うことに対する:5, 喫煙の:4, 喫煙に関する:3, 喫煙者への:3)

(59) 規制が(合計:11, 規制:8)

(60) 強くなったこと(合計:195, 強化されたこと:102, 強化:54, 厳しくなったこと:20, 強まったこと:8, 強化したこと:4)

ここも、これまでの動詞の名詞化の流れにそってまとめて、「喫煙への規制の強化」としたいところだが、「喫煙への規制が強化されたこと」で留まる学生が多数を占めている。

(61) 大人と子どもを(合計:157, 成人と未成年を:58, 成年と未成年を:24, 成人と未成年者を:22, 年齢を:8, 成人と子どもを:6, 成年者と未成年者を:4, 成人を:3, 未成年者を:3, 成人と未成年とを:3)

「大人」も「子ども」も話し言葉・書き言葉兼用であるが、日常的に使われる語であるため、半数弱の学生が修正をおこなっていた。しかし、その修正の仕方が難しい。

もっともよく使われていたのは、「成人」と「未成年」の対であったが、「未成

年」という表現に合わせて「成年」という語を、「未成年者」に合わせて「成年者」という語を使った者もあった。また、原文のように「成人」を年齢ではなく人と考え、「未成年者」と組み合わせるものや、そもそも「成人」と「成年」の選択をしなくて済むように「未成年者を」とする者、さらには「年齢」とする者もあった。こうした創意工夫は、語彙選択の能力の向上につながることを期待できる。

(62) 識別する (合計：6) (説明略)

(63) 自販機が (合計：177, 自動販売機が：129, 自販機の：31, 自動販売機の：16)

「自販機」を直したものが半数強に留まったことは驚きであった。「コンビニ」や「携帯」であれば、その定着度から考えて略称のままで使うことはありうるが、「自販機」は「ファミマ」や「取説」と同様、正式名称ではないという印象が筆者には強かったからである。略称は書き言葉では使わないほうがよいという意識が学生には希薄なのかもしれない。

(64) 取りいれられたこと (合計：162, 導入されたこと：103, 導入：46, 設置されたこと：3)

「取りいれられたこと」も「導入されたこと」に修正されることを期待していたが、実際に修正した学生は半数弱であり、さらに、名詞化を試みた学生は50名に満たなかった。

(65) などがある (合計：55, などが挙げられる：14, などが：14, 等がある：10, などが存在する：3)

原文どおりの表現であるが、55名が修正を試みていた。「その背景には」が文頭にあるので、「などが挙げられる」とするのはやや無理があると思われるが、「その背景として」と冒頭を合わせて修正することも可能だろう。また、「などが」という表現は(66)で「考えられる」と変更することを前提に選択される表現で、この選択は動詞を減らして簡潔にできる点では理にかなっている。

(66) と考えている (合計：222, と考えられている：134, 考えられる：21, と考えられる：19, ϕ ：17, が考えられている：6, と推測している：6, と推測されている：4, と考察されている：3)

「考えている」は主観的であるだけでなく、JTの判断なのか、書き手の判断なのか曖昧でやや不適切である。「考えられている」とすることで、書き手の判断ではなく、調査母体のJTの判断として示すことが可能である。一方、「考えられる」とすると、自発表現として書き手自身の自然な判断を表したり、可能表現として一般にそう考えることが妥当であることを示したりする。

(67) みたいだ (合計：329, ようだ：210, ϕ ：66, ようである：34, そうだ：7, らしい：5)

ここを修正しなかった学生が12名しかいなかったように、「みたいだ」が話し言葉であるのは明らかであろう。しかし、「ようだ」「ようである」とするのは、説明文としてはやや無責任な印象がある。実際に文章を書くときには、きちんと根拠を確かめたうえで、こうした推量の文末表現は取り去るのがよいだろう。

(68) なお (合計：23, また：16)

原文は「ちなみに」であったが、「なお」を「ちなみに」に変えた学生はひとりもいなかった。「なお」でも十分書き言葉的であると判断されたものと思われる。

(69) 男で (合計：312, 男性で：136, 男性の：127, 男子で：18, 男性：19, 男子の：8)

「男」に違和感を持つ学生は9割を超え、その多くは「男性」と修正している。しかし、なかには「男子」と修正する学生もあり、(22)で指摘したように「男子」を書き言葉として認識している学生も一部にいたことをうかがわせる。

(70) タバコを吸う人は (合計：217, 喫煙者は：154, 喫煙する人は：28, 喫煙者数は：16, 喫煙をする人は：8) (説明略)

(71) 歳に (合計：294, 年齢に：282, 年齢を：6)

「歳に」は多くの学生は直していたが、看過する学生も一部に存在した。

(72) 関係なく (合計：50, 関わらず：37, 問わず：6, 関わりなく：3)

「関係なく」は、漢語を使ったからといって文体が硬くなるとは限らない例である。ここでは、「かかわらず」としたいところだが、そのことに気づいた学生は15%に満たなかったのは意外であった。漢語であるから硬いと判断され、深くは追究

されなかったのだろう。

- (73) ずっと（合計：285，毎年：41，年々：37，ゆ：25，常に：24，継続して：21，継続的に：16，一貫して：13，例年：11，大幅に：9，連続して：9，長年：8，絶えず：6，大きく：6，続けて：5，長い間：5，長らく：4，長期にわたり：4，長期間：3）

「ずっと」は8割以上の学生が修正しており，その修正の仕方は多様である。「毎年」が最多であるが，次点の「年々」のほうが，書き言葉としてはこなれている。また，「常に」「継続して」「継続的に」なども意図はわかるが，原文にもある「一貫して」のほうがこの文脈にはふさわしいだろう。なお，副詞を入れるということ自体が話し言葉的であり，書き言葉ではできるだけ頼らないようにするという考え方もあり，25名は何も入れないという選択をおこなっていた。

- (74) 減ってきているが（合計：280，減少してきているが：137，減少しているが：98，減少傾向にあるが：18，減少し続けているが：7，減り続けているが：6）

最多は「減少してきている」だが，「ずっと」と「～してきている」は重複気味である。原文のように「減少している」を選択した者も相当数にのぼる。また，(73) で副詞を省略した場合，「～してきている」がやや話し言葉的なので，「～しつづけている」を選択した学生も一部に見られ，これもまた有力である。

- (75) 女で（合計：312，女性で：134，女性の：126，女性：20，女子で：17，女子の：8）（説明略）

- (76) タバコを吸う人は（合計：222，喫煙者は：151，喫煙する人は：28，喫煙者数は：17，喫煙をする人は：8）（説明略）

- (77) とくに（合計：27，とりわけ：19，主に：6）

特別の意味を表す副詞のうち，「とくに」「なかでも」は話し言葉・書き言葉兼用，「とりわけ」「ことに」は書き言葉専用である。個人的にはもう少し修正する学生が多いと予想していたが，多くの学生はあまり意識しなかったようである。ただ，表記は気になったらしく，27名の学生が「特に」と漢字に直していた。

- (78) 若い子たちを（合計：311，若者を：106，若年層を：87，若い世代を：35，

若者たちを：33, 若い人たちを：17, 若い女性を：7, 若年者を：4, 若い年齢層を：3, 若い人を：3)

「若い子たち」は多くの学生が気になったらしく、9割以上が修正していた。「若者を」がもっとも多く、「若年層を」がそれに続いている。「若い子たち」は話し言葉専用、「若者」は話し言葉・書き言葉兼用、「若年層」は書き言葉専用である。「若者」ではやや話し言葉的である一方、「若年層」では硬すぎるので、原文では「若い世代」としてあった。その選択は35名で、第3位であった。

(79) 中心に (合計：8, 中心として：4, 中心にして：4) (説明略)

(80) かえて (合計：149, むしろ：63, 逆に：26, 反対に：26, ϕ ：23, 対照的に：6)

「かえて」もやや話し言葉寄りであり、4割強が修正している。「逆に」「反対に」もありうるが、話し言葉・書き言葉兼用である。そのため、書き言葉専用の「むしろ」を選んだ者が63名と最多であり、副詞の存在自体が話し言葉的なので省略すると考えた者も23名にのぼった。

(81) ちょっとずつ (合計：339, 少しずつ：246, 徐々に：62, 次第に：3, 漸進的に：3, ゆるやかな：3, 微：3)

「ちょっとずつ」はさすがに話し言葉性が強すぎるだろう。修正しなかった者はわずか2名であり、全体でもっとも修正されていた箇所であった。修正後の候補としては「少しずつ」が最多で246名である。しかし、「少しずつ」は話し言葉・書き言葉兼用であり、さらに書き言葉らしくするには「徐々に」くらいだろう。また、原文は(82)と合わせ「微増」であるが、／／で挟まれたものを修正するという今回の調査の性格上、そうした修正はあまり見られなかった。

(82) 増える (合計：228, 増加する：136, 増加：43, 増加している：23, 増えている：9, 増加の：8, 増：4) (説明略)

(83) 傾向にある (合計：8) (説明略)

4. まとめ

以上の調査の結果から、学生が抱えている問題点を簡単にまとめておく。

- ①話し言葉専用の表現には比較的よく気づけているが、修正が、話し言葉・書き言葉兼用のレベルで留まり、書き言葉専用のレベルにまで達していないことが多い。
- ②書き言葉専用の表現の候補が複数ある場合、当該の文脈に合う表現にうまく絞りこめず、ぎこちない表現になることが多い。
- ③動詞を名詞化するなど、統語的なレベルでの話し言葉性が看過されやすい。

もちろん、「自販機」のような日常語として流布している省略語に気づかない、「同～」「当～」「本～」などの区別ができないなどといった、単に書き言葉に不慣れな面も垣間見られるが、総じていうと、目についたところを修正すること自体はできているものの、最初に思い浮かんだ修正案で満足してしまう傾向がある。よりよい表現を求めて試行錯誤するという推敲の姿勢を身につけさせることが、表現力向上のカギになるように思われる。

参考文献

- 石黒圭（2004）「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』7, pp. 3-13
- 石黒圭（2009）『よくわかる文章表現の技術Ⅰ 表現・表記編 [新版]』, 明治書院
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12, pp. 73-85
- 井上次夫（2009）「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』141, pp. 57-67
- 今村和宏（2004）「社会科学系基礎文献におけるサ変名詞のふるまい——作文指導への指針と『専門用語化指数』の試案——」『専門日本語教育研究』6, pp. 9-16
- 丸山岳彦（2009）「作文の文体情報——『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から見えるもの——」『日本語教育』140, pp. 26-36
- 森山卓郎（2003）「話し言葉と書き言葉を考えるための文法研究用語・12」『國文學 解釈と材の研究』48-12, pp. 15-22, 学燈社
- Chafe, W. (1985). Linguistic differences produced by differences between speaking and writing. In D. Olson, N. Torrance, & A. Hildyard (Eds.), *Literacy, language, and learning: The Nature and consequences of reading and writing*. pp. 105-122. Cambridge: Cambridge University Press.